経済論叢（京都大学）第173巻第3号，2004年3月

啓蒙と野蛮

——スコットランド啓蒙研究の可能性——[1)]

田中秀夫

I 現代思想のキャノンの投げかけるもの

現代思想家あるいは20世紀後半の思想家の幾人かは，啓蒙思想史研究にとって無視できない書物を残している。アドルノとホルクハイマーの共著『啓蒙の弁証法』（1947年），アレントの『人間の条件』（1958年）や『革命について』（1963年），ハーバーマスの『公共性の構造転換』（1962年），フーコーの『狂気の歴史』（1961年），『言葉と物』（1966年），『監獄の誕生』（1975年）などである。

ハーバーマスだけが啓蒙思想，というより西ヨーロッパの啓蒙の時代に「市民的公共性」の成立をみて西欧の18世紀の思想にポジティヴな評価をしていると解釈できるけれども，彼もまた，その市民的公共性はその後の社会の構造転換（管理社会化）によって失われてしまうというネガティヴな議論へと進む点

1) 本稿は，2004年2月21日に京大会館で開催された「スコットランド啓蒙：興隆と衰退」セミナー（主催，平成14-15年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究（B）（1）「近代共和主義の系譜とその現代的可能性の研究」研究代表者・田中秀夫および方法論研究会，京都大学経済学会後援）に報告として用意した「スコットランド啓蒙研究の可能性と日本の寄与」と題するものの大幅改稿である。筆者は世話人および報告者として参加したが，時間の関係で報告を遂行することができなかった。セミナーでは以下の6報告が行われた。佐々木武（東京医科歯科大学）「スコットランド啓蒙の何が問題か」，生越利昭（神戸商科大学）「スコットランド啓蒙の国際的契機：ヨーロッパとアイルランド」，竹本洋（関西学院大学）「スコットランドにおける啓蒙と経済学の関連」，渡辺恵一（京都学園大学）「思考の枠組みとしての自然法と共和主義　スミスにおけるその有効性と限界」，天羽康夫（高知大学）「啓蒙の文明概念の射程と現代的アクチュアリティ」，篠原久（関西学院大学）「D・ステュアートによる「スコットランド啓蒙」（最盛期）の総括」。

で，啓蒙の批判的理性が十分に機能せずに，野蛮に反転したのはなぜかというアドルノ＝ホルクハーマーの議論の深い刻印を引きずっている。

ここでの野蛮は異種なるものを劣等と決め付け，有無を言わせず殲滅することを意味するが，野蛮とは，一般的に，他者にたいして，理解に努めず，乱暴に振舞うことであり，最悪の場合は，他者の身体を毀損し，命を奪う行為を指す。他者を理解していても，友好的に振舞うことなく，暴力的に抑圧したり，排除したりすることも野蛮である。暴力的な支配は野蛮であり，権力によって行使される暴力も，正当な理由を欠く時は野蛮である。したがって，高貴な未開人は真に高貴な限り野蛮人ではない[2]し，洗練された文化をもった文明人も強欲に駆り立てられて，正当な理由なしに，他者を支配したり，抑圧したりする場合は，野蛮である。このような野蛮は啓蒙の価値である洗練とヒューマニマニティが克服を目指したものであることは，改めて述べるまでもない。

急進的な保守思想家ともいうべきアレントは，全体主義の起源の解明とその克服を主題とする思想家であり，したがって啓蒙のあとにホロコーストがあったという認識を自らの思想と学問の大前提にした思想家であるが，近代の理性は道具的理性に堕したというこれまたホルクハイマーの認識を踏襲していると解釈できよう。彼女は活動，仕事，労働を人間の本質的な営みとして挙げつつも，古典共和主義的な言語的相互関係概念，行為概念である活動の意義を力説した[3]。公共的行為における自己実現，自己目的としての活動が重要なのは，人間が道具的存在であってはならないというアリストテレス的，カント的な認識の帰結である。近代の人権思想一般もまた同じ思想を掲げたが，自然権思想は個人主義的である点でアレントの公共性の思想と異なる。

フーコーも，近代と近代の思想に，異質なものを排除する志向と規律化，ミ

2) ファーガスンが未開と野蛮を区別したのは，このような認識と関連がある。啓蒙の主流派は未開と野蛮を一体のものと見なして，概して，その価値を否定しようとしたが，しかし主流派といえども勇気や剛毅（忍耐力）では未開人がすぐれた能力を発揮することを認めた。しかし，それは，ミラーが明言しているように，本性的な特徴ではなく，境遇の結果であると理解された。

3) Arendt, H., *The Human Condition*, Chicago U. P., 1958.（清水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫，1994年）。

クロ権力，洗練された支配，社会の監獄化を透視する点で，アレントたちと共通のネガティヴな，しかし独自の近代批判を提出した。

そしていささか大雑把な言い方ではあるけれども，彼らの背後には啓蒙＝近代批判としての，マルクスの疎外論と物象化論，ウェーバーの合理化の帰結としての「鉄の檻」論が控えているように思える。

もちろん，こうした現代思想家の近代批判は，直接に啓蒙思想家の責任を問うものとは必ずしも言えないであろうが，しかし，それらの批判は啓蒙思想に無関係ではない以上，啓蒙思想の研究者はそうした批判を無視せずに受け止める必要があるだろう。すなわち，啓蒙思想の研究を通して，現代思想家のこのような近代批判・啓蒙批判を黙殺するのではなく，それに応えなければならないと思われるのである。また実際に，啓蒙研究者は，目立たない形ではあるけれども，そのような批判に対して，自らの研究を通して，多かれ少なかれ，いわば啓蒙思想家に代わって，応えようとしてきたのだと思われる。なぜ啓蒙思想の研究を行うのかという秘められたモチーフを，啓蒙思想史家は必ずしも語らないが，啓蒙思想の研究は，歴史研究一般と同じく，歴史研究を通じて社会・文化・思想に光をあて，ポジティヴなものとネガティヴなものの解明，またその両者の弁証法の解明を目指す営みであることに間違いないであろう。ウェーバーやE・H・カーをひくまでもなく，歴史研究は比較視点からする迂回的現代研究なのである。

現代思想家のなかでハイエク，ポッパー，バーリンなどは，左右を問わず，全体主義的な思考に警鐘を鳴らし，近代の自由主義・個人主義に全体主義を克服する手がかりと可能性を求めたという意味で，啓蒙へのポジティヴな視点を持っているように思われるが，デカルト主義に代表されるような，啓蒙主流の理性の過大評価を戒めたという点では，単純な啓蒙礼賛ではないことは言うまでもないであろう。

冒頭に挙げたような現代のキャノンは，現代という時代のペシミズムに色濃く染め上げられている。近代文明の進歩は，進歩の理想を裏切って，前代未聞

の悲劇を次々と繰り広げてきたから，それは無理からぬことである。ナチス・ドイツがホロコーストを生み出したということは厳然たる事実であるし，スターリン体制下のラーゲリ，日本軍による南京虐殺，米軍による広島と長崎への原爆投下，そして9.11テロもまた恐ろしい衝撃であった。そのような衝撃的な出来事，悲劇に現代文明のすべての帰結を求める悲観論，さらにはすべてをペシミスティックに分析する決定論には，救いもなければ，可能性もない。またそのような事件を啓蒙の敗北として直接に啓蒙の責任であるかのように捉えるのは，正しいとは言えないであろう。

もっとも，啓蒙時代の西欧の強欲は，啓蒙思想家の強欲批判にもかかわらず，西インド諸島を中心とするカリブ海周辺での奴隷制を急速に拡大し，奴隷商人とプランターは暴利を貪ったから，その限りで啓蒙は敗北したと言い得るであろう。しかし，半世紀後の奴隷貿易の廃止は啓蒙の勝利でもあった。

さらにまた啓蒙時代の大ブリテンについて言えば，この時代のジェントルマン資本主義は，支配と利権を求めて，アジア，アメリカ，アフリカへの帝国の道を模索し，原住民の文明化と収奪をほしいままに行ったのであるが，それを強く批判したアダム・スミスとて，現実を変革するに至る有効な批判を行えなかったことは，思想と学問の敗北であり，啓蒙の蹉跌であったと言わなければならない。のみならず，スミスの自由主義的な経済学を継承したマルサスによってヘイリーベリで教育された高等文官は，インド植民地に赴任して，インドの富で自らの懐を満杯にすることを恥じなかった[4]。

こうして近代と啓蒙は一方で厳しく断罪されてきたのであるが，しかしながら，過去数百年間を振りかえるまでもなく，絶望もあれば，希望もあるという弁証法を人類が経験してきたことは明らかなように思われる。絶望的出来事ばかりが思い浮かぶけれども，最近の希望の例をとると，ゴルバチョフの登場とペレストロイカ，そしてとりわけベルリンの壁の崩壊とそれに続いた東欧社会主義体制の解体と冷戦の終焉は，ユーゴスラビアの解体の帰結として内戦の悲

4) Cf. Thompson, E. P., *Customs in Common*, Merlin Press, 1991, pp. 281-282.

劇を生まないではおかなかったが，にもかかわらず20世紀の最大の歓迎すべき事件であった。

歴史には，このように予想を越えた転換が起こりうることを現代人は改めて認識した。したがって，安易な楽観を説く無責任な言説はもとより退けなければならないけれども，ペシミスティックな絶望の大きな物語で社会と思想を覆うのではなく，常に希望への可能性をもつものとして現実を見つめつつ，できるだけ緻密に社会と思想の可能性を分析する必要があるだろう。絶望的な第三世界を見つめてきたハーシュマン[5]や血で血を洗うような民族紛争を追いかけているイグナティエフ[6]が現代思想家に列して絶望を語らないのは，絶望から脱出する現実的可能性を常に見据えているからである。

絶望と理性への不信を語る現代思想家の背後にあって，彼らがしばしば参照している，マルクスとウェーバーの理論を，またフロイトの思想を，ペシミズム一色で理解することは言うまでもなく疑問である。マルクスは貧困からの解放の可能性を，ウェーバーは鉄の檻からの脱出の道の模索を，そしてフロイトは野生の馴致，文化への昇華を，決して諦めなかった。

またアカデミックな仕事は歴史であれ，理論であれ，緻密な分析と考察を通して，建設的な思想や活動の可能性を探ってきたように思われる。厳密な思想史分析の強みは，その意味で，やがて希望をもたらす細部に宿る光を照らすことにあるのかもしれない。

II 啓蒙概念の拡散

近年の欧米におけるスコットランド啓蒙研究の動向をみていて気付くことは，第一に，その研究テーマの多様性と広がりということであり，第二に，ますますフランス啓蒙の研究——それは他の啓蒙研究に遥かに先駆けて進んで来た

5) Hirschman, A. O., *A Propensity to Self-Subversion*, Harvard U. P., 1995.（田中秀夫訳『方法としての自己破壊』法政大学出版局，2004年）。

6) Ignatieff, M., *Blood and Belonging: Journeys into the New Nationalism*, 1993.（幸田敦子訳『民族はなぜ殺しあうのか』河出書房新社，1996年）。

――と区別しがたくなってきたということである。これは研究者の問題関心と分析手法に，差異よりも共通性が強くなってきたということを意味する。

「啓蒙思想とはなにか」という問題は，スコットランド啓蒙研究にとっても常に問題である。啓蒙の概念規定は，カントの有名な定義「未成年状態を脱却すること」――あるいは「敢えて賢かれ」，「自己みずからの悟性を使用する勇気をもて！」――に始まり，今日のアナール派の様々な知的プロジェクトとしての啓蒙の概念まで，多様である。しかし，そもそも，アウトラムが指摘するように[7]，『ベルリン月報』が「啓蒙とは何か」と問いかけたのは，ドイツ，フランス，イタリアで啓蒙の意味に差異があると思われていたからである，というのは重要である。

けれども，全般的には，啓蒙を理性による無知からの人間の解放という普遍的運動として，普遍性に注目してとらえる解釈が長く通説であった。啓蒙思想とはモンテスキュー，ディドロ，カントなどの古典によって生み出された「自然と社会」に関する共通性をもった思想を意味するという通説の代表はカッシーラー[8]である。ゲイ[9]は啓蒙思想を「神経の快復」と「自由の科学」というサブテーマの束で括りながら，また啓蒙思想にアンシャン・レジームとの対決という戦略を読みとりながら，カッシーラーの統一的理解を押し進めた。すなわち，ゲイは啓蒙のプログラムを宗教への敵対，理性の批判的能力による自由と進歩の追求として定義した。ゲイは啓蒙を自由主義的改革への志向と同一視した。したがってルソーを重視せず[10]，逆にジェファースンやフランクリンに着目することによって，ゲイは，啓蒙の古典的思想家の範囲を拡張した。フ

7) Outram, D., *The Enlightenment, New Approaches to European History*, Cambridge University, 1995.

8) Cassirer, E., *The Philosophy of the Enlightenment*, Boston, 1964. (originally, 1932).

9) Gay, P., *The Enlightenment*, Vol. I: *The Rise of Modern Paganism*, Vol. II: *The Science of Freedom*, New York, 1966-1969. (中川久定他訳『自由の科学　ヨーロッパ啓蒙思想の社会史』1，2，ミネルヴァ書房，1982年，1986年)。

10) アンビヴァレントな思想家ルソーは，啓蒙思想家でないのではなく，啓蒙の価値を一面では承認する啓蒙思想家でありながら，しかしそれに，さらにはフランス啓蒙のサロン的様式に満足できず，啓蒙の価値を超えようとした啓蒙の左派，急進派という一面を持っている。

ランスとイングランドだけではなく，スコットランド，ドイツ，イタリア，アメリカの思想家にもゲイは注目した。当時としては，ゲイの視野は広く，啓蒙思想の範囲は拡大深化されたと言えよう。しかしながら，ゲイは思想の背後にある社会的文脈には関心を払うことが少なかった。女性思想家にも光は当てられなかった[11]。けれども，ゲイは啓蒙の統一性のなかでの差異と多様性に気付いていた。

アウトラムが指摘するように，ゲイの研究以後，啓蒙の統一像を求める傾向より，多様性に力点を置く傾向が次第に目立ってくるように思われる。その転換点に立つ著作を特定するのは困難に見える。アウトラムによれば，統一的理解を否定する転換点はメイの『アメリカ啓蒙』[12]であったが，スペインの植民地における啓蒙に着目したアルドリッジ[13]にはすでにそのような方向性があったという。

啓蒙の地理的領域がこうして1970年代には拡大した。とくにフランコ・ヴェントゥーリ[14]がヨーロッパの辺境，周縁における啓蒙の概念を提起したことの影響は大きいものがあった。イタリア，ギリシア，バルカン半島，ポーランド，ハンガリーなどである。この時期にスコットランド啓蒙の概念も成立する。ヴェントゥーリは[15]周縁の啓蒙が，マージナルマン的に，啓蒙思想の孕む緊張をよりよく分析できたとしている。

1970年以降，啓蒙の社会的基礎や思想の普及過程などに注目が広がっていく。ダーントン[16]やシャルチエ[17]が新しい動向の代表であった。啓蒙への接近方法

11) 女性思想家の発掘と研究はその後，長足の進歩を遂げ，すでに膨大な研究が生まれつつある。文献リストは省略する。

12) May, H. F., *The Enlightenment in America*, New York, 1976.

13) Aldridge, A. O. (ed.), *The Ibero-American Enlightenment*, Urbana, Il., 1971.

14) Venturi, F., *The End of the Old Regime in Europe 1768-1776: The First Crisis*, Princeton, 1989, *Settecento riformatore. III. La prima crisi dell'Antico Remime*, Turin, 1979.

15) Venturi, F., *Utopia and Reform*, Cambridge, 1971, p. 133.（水田洋・加藤喜代志訳『啓蒙のユートピアと改革』みすず書房，1981年）。

16) 主要な邦訳のみ記す。ダーントン，海保真男・鷲見洋一訳『猫の大虐殺』岩波書店，1986年，ダーントン，関根素子・鷲見洋一訳『革命前夜の地下出版』岩波書店，1994年，その他。

17) 主要な邦訳のみ記す。シャルチエ，福井憲彦訳『読書の文化史　テクスト・書物・読解』新↗

は多様化した。こうして，研究の進展に従って，多様性と差異に注目する傾向が強くなってきたし，その研究成果は膨大な蓄積となっている。哲学や政治学，法学，経済学，社会学といった伝統的な学問だけでなく，構造主義以後の新学問，精神分析学，言語学，記号論，構造人類学，経済人類学，ミクロ・ヒストリーなどの新しい学問分野の理論的用具を援用した――そして啓蒙研究においてもテクスト・言説分析の方法の革新としての「言語論的転回」という傾向が圧倒的なものと成ってきた――社会文化史的な啓蒙研究の結果，多くの新事実が発掘され，解明されたけれども，その結果，啓蒙は今日ではもはや単純明快な定義を持たない曖昧な概念になってしまったことも否定できない。

けれども，啓蒙は，有閑階級のサロン文化にとどまるものではなく，先端的には急進的啓蒙が象徴するように，本質的に専制政治，野蛮，迷信との闘いであり，自由，洗練，合理性を求めた。思想と行動の自由，洗練・穏和化，相互理解を目指す啓蒙は著しい不平等も退けたから，社会の平等化も目指したはずである。それぞれの地域の文脈において，多様な形態をとったとしても，剝き出しの権力支配，頑迷固陋な迷信の支配，野生の力の暴威など――アンシャン・レジーム――に対決して，真理を追求し，正義と富，自由と平等，そして穏和で平和な文化を目指したのが，啓蒙の精神であったことを忘れてはならないであろう。このような側面を強調するとき，啓蒙はもはや18世紀に固有の概念ではありえず，地域によって啓蒙の時代は18世紀からさらに遡ることも，下ることもありうるものとなる。現に初期啓蒙という用語がしばしば17世紀に用いられているし[18]，明治啓蒙[19]，ウィーン啓蒙[20]はそれぞれ19世紀，20世紀初頭を指して用いられている。

↘曜社，1992年，シャルチエ，長谷川輝夫訳『書物の秩序』文化科学高等研究院出版局，1993年，シャルチエ，長谷川輝夫・宮下志朗訳『読書と読者』みすず書房，1994年，シャルチエ，杉浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』岩波書店，1994年，その他。

18) 一例をあげれば Hochstrasser, T. J., *Natural Law Theories in the Early Enlightenment*, Cambridge U. P., 2000.

19) Mizuta, H. and Sugiyama, C. (eds.), *Enlightenment and Beyond: Political Economy Comes to Japan*, University of Tokyo Press, 1988.

20) Francis, M. (ed.), *The Viennese Enlightenment*, Croom Helm, 1985.

さらに啓蒙の下位概念として，今ふれた急進的啓蒙のほかに，聖職者啓蒙(Clerical Enlightenment)，保守的啓蒙（Conservative Enlightenment）などが用いられているのは，担い手集団によって差異があるからに他ならない。しかし，それらはすべて分析のための方法概念，二次的概念であることは言うまでもない。したがって，研究の進展によって維持し難くなるとき，捨てられるであろう。例えば，「スコットランド歴史学派」の概念は，そのような運命にある。

他方，野蛮がかならずしも民衆の属性ではなく，むしろ新しい啓蒙の科学に孕まれた危険性の一つであるという視点をもったトムスンの民衆史は啓蒙の別の地下水脈を掘ろうとしているが，それは未だ，思想史研究と適切に接合されていないように思われる[21]。そのことは，トムスンも源流に位置づけられるカルチュラル・スタディーズ[22]を啓蒙思想史研究にどう汲み上げるかという問題として受け止めるべきであろう。

III　スコットランド啓蒙研究の可能性

スコットランド啓蒙も啓蒙である以上，上に見たような研究動向が教える，多様な知的プロジェクトであるという資格は備えている。またグラスゴウ，エディンバラ，アバディーンにおける啓蒙のプロジェクトの差異に注目してローカル色を押し出すことにも根拠はある。しかし，そのプロジェクトのなかでとりわけ特徴的なのは，それぞれに独創性の程度は違うものの，道徳哲学の体系を多数生み出したこと，法学と歴史学の体系的な著作，大著もまた多数生み出したこと，そして経済学の体系も１，２生み出したことである[23]。近年の研究

21) Thompson, E. P., *Customs in Common*, Merlin Press, 1991.

22) さしあたり次を参照，Chun, Lin, *The British New Left*, Edinburgh U. P., 1993.（リン・チュン，渡辺雅男訳『イギリスのニュー・レフト　カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社，1999年）。

23) 曖昧な言い方をしたが，ステュアートとスコットランド啓蒙の関係は微妙である。しかし，その交友関係からしてもまったく無関係とは言えないであろう。ヒュームに経済学の体系があるかないか，これも微妙である。思考としては相当体系的であるが，表現形態はエッセイである。

が著しく進展するなかで，とりわけポーコックがブリテンの啓蒙を強調するようになって以後[24]，スコットランド啓蒙のこのような特徴は忘却されがちであるが，ロバートスンが再確認を促していることは，重要である[25]。あえて大胆な定式化をするなら，スコットランド啓蒙において社会の経験的歴史的な理解という新しいパラダイムとしての文明社会史が誕生したことが決定的な出来事であった。ヒューム，スミス，ファーガスン，ミラーたち，スコットランド啓蒙知識人を貫く思想的特徴はこの文明社会史である。

スコットランド啓蒙，スコットランドの学問の発展を育んだ場所は直接には公共空間としての大学と図書館であった。神学を中心とするイングランドの2大学に対してスコットランドは4大学（セント・アンドルーズ，エディンバラ，グラスゴウ，アバディーン）を擁し，神学のみならず，世俗的な学問の新しい展開において，また国際交流においても，先進的であった。啓蒙時代のスコットランドの大学にはスコットランド，アイルランドからは言うまでもなく，イングランドからさえ学生が来た。スミスのようにスコットランドの大学を経て，イングランドの大学へ留学した場合もあるけれども，より多くは医学生，法学生としてオランダ（ライデン，フロニンヘン）へ留学した。しかもスミスはオックスフォードの学問の沈滞には辟易したのであった。ただし，貴族も，ジャコバイト知識人も，国際交流では先進的側面を持つ。

大学が学問と思想の拠点となったのは，前世紀から18世紀にかけてのオランダ，ドイツ，スコットランドであった。大学は社会の統治階級を教育するという役割を持っていたが，そのことが逆に教授たちの学問に一定の特徴を与え，社会のリーダーの倫理，統治の知識を重視することにつながった。1680年の弁

24) Pocock, J. G. A., "Clergy and Commerce: The Conservative Enlightenment in England" in *L'età dei lumi: Studi storici sul settecento europeo in onore di Franco Venturi*, eds. by Raffaele Ajello et al, 2 vols., Naple: Jovene, 1985. I: pp. 523-562; Do, "Gran Bretagna" in L'Illuminismo: Dizionario storico, eds. by Vincenzo Ferrone and Daniel Roche, Rome and Bari, Laterza, 1997, pp. 478-497.

25) Robertson, J., "The Scottish Contribution to the Enlightenment" in *The Scottish Enlightenment: Essays in Reinterpretation*, ed. by Paul Wood, University of Rochester Press, 2000.

護士会による創設の決定を受けて，サー・ジョージ・マケンジーによって1689年に創立宣言がなされて始まったエディンバラの法曹図書館（ナショナル・ライブラリとなるのは1925年）は18世紀始め（1709年）に納本制度を導入して以来，最初の本格的な図書館として法学を中心として歴史，神学，雑録を含む多数の文献を収集していた[26]が，ヒュームが『イングランド史』を執筆できたのも，この図書館を利用できたからである。

またスコットランドは合邦（1707年）によって議会を失ったが，フレッチャーが怖れたように，文化全般と社会の活力がそれによって衰えたわけではなかった。議会に代わって，またサロンに代わって，大学，教会，図書館，そして街路（エディンバラのロイヤル・マイルのような）や「選良会」のような団体，様々な同好者の集い，コーヒー・ハウス，などが公共空間の役割を果した。裕福な大貴族がいなかった禁欲的なカルヴィニストのスコットランドでは，ヴェルサイユ宮殿や貴婦人の宮廷におけるサロン文化のようなものは花開かなかったし，劇場も攻撃されて，演劇などの娯楽文化は低調であったが，しかし，言論出版は栄え，『スコッツ・マガジン』（1739年創刊）のような定期刊行物をはじめとする出版文化は，最初の『エディンバラ評論』（1755-1756年）のように個々には破綻もあったが，全般的にはますます活況を呈していた。したがって，中間階級の文化が社会的必要を補完したと言えるかもしれない[27]。

大学，教会，法は合邦にもかかわらず，スコットランドに固有の，その意味で伝統的な制度が温存された。けれども，スコットランドの大学も，教会も，法も，イングランドにもまして改革の時代を迎えていたということに注目すべきであろう。大学は1703年にエディンバラ大学の学長になった長老派牧師のカーステアズの改革以来，リージェント制度から教授制度に移行していったし，

26) Cadell, A. and Matheson, A. (eds.), *For the Encouragement of Learning: Scotland's National Library 1689-1789*, Edinburgh, 1989, p. ix, 1, 15, 25.

27) フランスは王侯，大貴族の貴婦人の宮廷がサロンとなり，文化的な公共空間としての役割を果した。哲学者は大学人ではなく民間人・ブルジョワ・三文文士として，あるいは下級貴族としてサロンの人であった。最新文献として赤木昭三・富美子『サロンの思想史　デカルトから啓蒙思想へ』名古屋大学出版会，2003年が出た。

カリキュラムも近代社会にふさわしいものに改革されていった。教会も前世紀の異端審問，魔女狩りの熱狂は去り，穏健派が支配権を握る時代に移っていく。そして法はステア，マッケンジー，アースキンなどによる前世紀以来の体系化によって，より合理的な体系へと整理，洗練されていく。限嗣相続制度のような復古現象も例外的には存在したが，伝統的制度にも進取の精神が吹き込まれていたということは，重要である。

そしてその根底に，封建社会から近代の商業社会へと急速に変貌していく社会の実態があった。ここでもアーガイル公爵やケイムズ卿からアンドルー・ワイトやオーミストンのコバーンまで，上流階級から中下層階級まで巻き込んで，所領の改良や計画村落，農法の改良，新作物の導入等々の改良運動が展開された。ハイランドの平定と移民・移住・産業振興政策，とりわけリンネル産業を振興した産業振興協会，ミルトン卿とケイムズ卿のシヴィック・リーダーシップ，また限嗣封土権廃止運動における弁護士会とケイムズ卿の活動など，ランドからインダストリへの価値の急転換の推進として理解できるであろう。

イングランドが体系的著作をもたらしたのは哲学，政治学と法学におけるホッブズ，ハリントン，ロック，自然哲学におけるニュートンを生み出した17世紀後半のことである。フランスにも体系的著作は16世紀のボダンの『国家論』，この時代のモンテスキューの『法の精神』，そしてルソーの『エミール』，ビュフォンの『自然史』，ドルバックの『自然の体系』などにように，少なからず存在する。ドイツ語圏ではプーフェンドルフ，ライプニッツ，トマジウスの自然法学，そしてカントの著作などが有名である。

けれども，人口で同時代のイングランドの1割程度と推定される小国スコットランドにおいて，18世紀中葉以降ほとんど半世紀の間に書かれた体系的著作は，質量共に群を抜いているように思われる。ハチスン，ターンブル，フォーダイス，ケイムズ，ウォレス，ヒューム，ファーガスン，スミス，ミラー，リード，モンボド，D・ステュアート，ロバートスン，ブレア，G・ステュアート，ウィザースプーン，J・ヒュームなどの数々の著作が，1745年の最後

のジャコバイトの乱の頃からフランス革命を経て19世紀の始め頃までに刊行された。

それには好都合な様々な事情が関係していたが，これはたんに偶然でも程度の差でもないように思われる。すなわち，社会の学問精神の本質的な差異がここに表現されているように思われるのである。説明は容易ではないが，これはたんに程度の差ではなく，方法とエートスの差異を示しているように思われる。何がスコットランド啓蒙の著しい成果をもたらす原因として作用したと考えられるだろうか。

体系が体系の精神に堕してしまわないためには，経験的基礎が強固でなくてはならず，それはイングランド経験論がスコットランドに教えた。スコットランドの体系はデカルト主義的体系ではない。体系自体は17世紀の自然法，さらにはローマ法が教えた。

しかし，スコットランドの自然法思想は，マンデヴィル流の意図せざる結果を重視する傾向がかなり強く，設計主義でも理性万能主義でもない。自然法思想の系論としての社会契約説は意図による結果の創出の思想であるが，この作為の論理を批判的，歴史的に検証する歴史的経験主義がスコットランドには存在した。社会契約説を堅持したハチスンの自然法思想，道徳哲学には，意図せざる結果の論理はなく，そのことはハチスンにおける歴史の不在と対応している。主体の論理によって社会を構築するという実践的姿勢がハチスンの特徴であるが，その背景にあるのは，アイルランドとスコットランドの後進性であった。歴史的経験主義が定着するのは，1745年以後の急速なスコットランド社会の変貌後のことであり，おそらく，意図せざる結果の論理は，このような結果を経験した次の世代がはじめて持ちえた比較的歴史的視点が教えたものと思われる[28]。そして，私見では，今後論証しなければならないけれども，ハチスン

28) 意図せざる結果の論理は，スミスによって重商主義批判の分析用具として駆使されたように，作為の論理の批判にきわめて有効であったが，しかし，論理としては保守的論理ともなりうる。この点についてはハーシュマンを参照すべきである。Hirschman, A. O., *The Rhetoric of Reaction*, Cambridge: Belknap Press, 1991.（岩崎稔訳『反動のレトリック　逆転，無益，危険性』／

の自然法とヒューム，スミスの歴史主義を媒介するのは，あるいは両者の中間点に立つのは，ケイムズの摂理史観であり，ミークとシュタインが注目しているように[29]，ケイムズの『法史論集』に先駆的な，四段階論に近い歴史発展論が見られるのはそのような裏付けとなるであろう。

そして持続的な学問的精励のエートスは，産業における勤労の気風とともに，後進プロテスタント小国というスコットランドの境遇から生まれた。この点ではオランダというプロテスタント先進小国の模範ももちろんあった。

ストラーン（William Strahan）やマリ（John Murray）のようにロンドンに出て出版業に成功したスコットランド人の意欲的な支援もスコットランドの学問の振興に好都合であった[30]。

このような様々な内的・外的要因の作用の結果としてスコットランド啓蒙の精華の形成を理解する研究は，まだまだ精緻に遂行すべき余地を残しているし，スコットランド啓蒙の国際的契機――アイルランド，アメリカ，フランス，オランダ，ドイツ，イタリア，そしてイングランド――の究明もまだ多くは未開拓である。

スコットランド啓蒙の盛期は1745年のジャコバイトの敗北以後に到来するが，1707年の合邦が啓蒙に対してもった意味をジャコバイト運動との比較の視点から考察することは，多くの研究が遂行してきた。また啓蒙思想の起源を17世紀スコットランドに遡って検出するという研究もなくはない。しかし，そのような内在的要因の分析だけでは不十分であって，特に大陸の思想の影響に注目する研究が不足している。さらにまたロバートスンが代表するように，大ブリテンの帝国形成の文脈でスコットランド啓蒙を捉え直すという研究動向が近年生

＼法政大学出版局，1997年）。

29) Meek, L., *Social Science and the Ignoble Savage*, Cambridge U. P., 1976. Stein, P., *Legal Evolution*, Oxford U. P., 1980.（今野勉他訳『法進化のメタヒストリー』文眞堂，1989年）。

30) Cochrane, J. A., *Dr. Johnson's Printer: The Life of William Strahan*, Routledge and Kegan Paul, 1964. 本書は貴重な研究であるが，スコットランド啓蒙研究が盛んになる以前の研究であり，副題にも限界が示されている。Zacks, W., *The First John Murray and the Late Eighteenth-London Book Trade*, Oxford U. P., 1998.

まれてきている[31]。

いずれにせよ，すでに膨大な研究業績が存在しているものの，フランス啓蒙の研究成果に比しても，まだまだ十分に解明されていない問題，側面が多数存在するのであって，スコットランド啓蒙研究の可能性は大きい。

スコットランド啓蒙の精華としての体系的経験主義的な社会の学問——道徳哲学，歴史学，経済学——は土着と外来の諸要素のアマルガムであり，ハイブリッドであった。ハイブリッドな社会の学問として異例の生産性を実現したスコットランドの学問そのもののより深い分析が求められているように思われる。この雑種性は重要である。自然法と共和主義およびキリスト教という三つの異なる伝統の相克が，スコットランドにおいて激しい発酵を経験して，新しい雑種，というよりむしろ新しい総合としての道徳哲学と歴史哲学と経済学を生み出すことに大きな影響を与えたということは，ほぼ確かである。そこには伝統思想，枠組みからの大きな飛躍（パラダイム転換）があるように思われる。このように，雑種がもたらす新しい総合（新パラダイムの形成）としての新しい可能性は，幕末以来の日本も経験したように，常にアクチュアルな問題である。

IV スコットランド啓蒙研究への日本の貢献

「日本文化の雑種性」は加藤周一のテーゼであり[32]，それは丸山真男の「日本の思想」[33]の「雑居性」テーゼと対照的である。丸山はその雑居性論によって加藤の雑種性批判も意味していた[34]。「加藤周一は日本文化を本質的に雑種文化と規定し，これを国粋的にあるいは西欧的に純粋化しようという試みがいずれも失敗したことを説いて，むしろ雑種性から積極的な意味をひきだすよう

31) Robertson, J. (ed.), *A Union for Empire: Political Thought and the Union of 1707*, Cambridge U. P., 1995.

32) 加藤周一「日本文化の雑種性」『思想』1955年5月，加藤周一「雑種的日本文化の希望」『中央公論』1955年7月。

33) 初出，『現代日本の思想』（『岩波講座現代思想』第11巻，1957年11月）。

34) 丸山真男『日本の思想』岩波新書，1961年，63-64ページ。

提言されている。」これは傾聴すべきだが，こと思想に関しては若干の補足が必要であるとして，丸山はこう続けている。

「第一に，雑種性を悪い意味で「積極的」に肯定した東西融合論あるいは弁証法的統一論の「伝統」もあり，それはもう沢山だということ，第二に……問題はむしろ異質的な思想が本当に「交」わらずにただ空間的に同時存在している点にある。」多様な思想が内面に交わるなら，雑種という新たな個性が生まれることも期待できる。「雑居を雑種にまで高めるエネルギーは認識としてもやはり強靱な自己制御力を具した主体なしには生まれない。その主体を私達がうみだすことが，とりもなおさず私達の「革命」の課題である。」

加藤と丸山のテーゼは，神島二郎の日本文化における「馴化」の概念に継承された。日本文化の雑種性はその後，大沼保昭の主張としても知られる[35]が，最近は小熊英二[36]によっても流布されている。

厳密に雑種文化でないような文化は，今ではほとんど地球上に存在しないであろう。また馴化は，異化とともに，外来の思想や文化が輸入されるとき，普遍的に発生するのであって，日本だけの問題ではないが，しかし，神島は，丸山の言うように日本では固有の価値の基軸がないがゆえに抵抗の契機が弱く，したがって丸山が無視した「馴化」がスムースに働くと分析した。古代末期における律令の輸入，幕末・開国・明治維新による西洋文化の輸入を，確かに日本は首尾よく遂行したと言えるであろう。このような柔軟性は日本の特徴であるかもしれない。それはまた中空構造の天皇制，あるいは神道に象徴される精神的伝統と無関係ではないかもしれない。さらに言えば，「和をもって尊と成す」律令国家以来の伝統とも関係するであろう。

もちろん，雑種であればよいというわけではない。雑種であること以上に重要なのは，雑種のポジとネガに自覚的であることだと思われる。そして丸山真男が日本の学界の「蛸壺」的ありようとして指摘したことが，より重要に思わ

35) 大沼保昭『単一民族社会の神話を超えて』東新堂，1986年。
36) 小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社，1995年。

れる。蛸壺的であるという精神構造の結果は，虚心に他から学ぶことができないがために，学界が知的成果を共有できず，学問共同体として成長も飛躍もできないということを日本の思想的伝統の弱点として丸山は指摘していた。そのような徴候は，もちろん，今なお残っていて，克服すべきであろう。

戦前に遡るわが国の学史・思想史研究の伝統（とは言っても未だ一世紀にもならない）には古典派経済学，重商主義，自然法思想についての相当に厚い蓄積がある。それを批判的に参照することが学問の作法として確立されなければならない。それがなければ，学問の頽廃をもたらすであろう。わが国の伝統を踏まえなくとも，確かに個別的には優れた研究は生まれる。それは，しかしながら，なにも継承なしに生まれるわけではない。海外の研究に示唆され，刺激されて，独創的な研究が生まれることが多いのは，そこに継承すべき多くの知識と知恵，方法があるからに他ならない。

ではスコットランド啓蒙研究に関して日本の寄与はいかに可能か。日本独自の貢献の余地があるのだろうか。わが国の研究者のこれまでの寄与をまずふりかえってみることから検討の手がかりを求めよう。

このようにふりかえったとき，日本におけるスコットランド啓蒙研究は水田洋から始まり，そして水田洋の貢献が大きいことは言うまでもない。水田の貢献は全体としては，研究手段の整備・提供という側面の貢献が目立っている[37]。けれども『思想の国際転位』（2000年）に収録された論文等における水田の独創性は際立っている[38]。それは英米にも研究がない新しい資料と問題の発見という研究上の僥倖，偶然性，事件性の産物である。これは学究の持つ，飽く事なき好奇心が拓く可能性として理解できるであろう。

37) Mizuta, H. (ed.), *Adam Smith's Library*, Oxford : Clarendon Press, 2000. Do. (ed.), *Adam Smith : Critical Responses*, 6 vols., Routledge, 2000. その他，天羽康夫によるファーガスンの Essays のテクスト作成も重要な貢献である。Ferguson, A., *Collection of Essays*, ed. with an introduction by Yasuo Amoh, Rinsen, 1996.

38) 水田洋「アイアランドの啓蒙とデンマークの専制」，「『アドルフ』とアダム・スミス」（以上『思想の国際転位—比較思想史的研究』名古屋大学出版会，2000年に収録），「スコットランド啓蒙と市民革命」（田中正司編『スコットランド啓蒙思想研究』北樹出版，1988年）がとりわけ注目すべきである。

水田に続いた重要な研究は佐々木武の論文である[39]。これはパスカル以来のスコットランド歴史学派論を「文明社会」認識の成立という視角から，当時としては，英米に先駆けて掘り下げた独創的な研究である。

スコットランド啓蒙研究にとって無視できないのは小林昇の研究である。小林昇のステュアートやスミスの研究は経済学の形成に限定されているが，そしてそのような学史への制限は思想史への批判を含意するが，しかし，それをスコットランド啓蒙研究に生かす余地があるだろう。ホントがスコットランド啓蒙のなかで取り上げた「富国—貧国論争」は，スコットランド啓蒙という舞台装置におけるものではないけれども，少なくともその核心部分は小林昇によって，20年以上先駆けて，より広い英仏経済学論争というコンテクストにおいて研究されていた[40]。

またスコットランド啓蒙を視野に置きながらスミスに特化して精力的な研究を進めたのは田中正司[41]である。TMS—法学講義—WN の展開の論理を田中ほど執拗に追いかけた研究者は欧米にも例を見ない。この業績は，日本において戦後構築されたマルクス研究の緻密なテクスト分析との共通点を見ることができるように思われる。けれども，スミスの思想的背景としてのカルヴィニズムの自然神学をますます強調していったその見解には異論を持つし，また田中が『国富論』については十分な分析をしなかったことは留意しなければならないであろう。

『国富論』を自然法の歴史的コンテクストに置き，配分的正義論として解釈することを大胆にやってのけたのはホント＝イグナティエフである。かれらは，「『国富論』の中心的関心は正義の問題であり，所有の不平等と所有から排除

39) 佐々木武「『スコットランド学派』における『文明社会論』の形成」『国家学会雑誌』第85巻7・8号-第86巻1・2号，1972-1973年。

40) 小林昇『経済学の形成時代』未来社，1961年。

41) 田中正司『アダム・スミスの自然法学』，御茶の水書房，1988年，田中正司『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房，1993年，田中正司『市民社会理論と現代』御茶の水書房，1994年，田中正司『アダム・スミスの倫理学』上，下，御茶の水書房，1997年，田中正司『経済学の生誕と『法学講義』——アダム・スミスの行政原理論研究——』御茶の水書房，2003年。

された人々への十分な生活資料の供給を両立させることができる市場機構を見いだすことであった」[42] と言う。田中も彼らの説に異論がないのであろうか。確かにホント＝イグナティエフの主張は，『国富論』を財の生産と配分の理論として，すなわち経済学の原型として理解している常識に対して，覚醒効果をもった主張である。

けれども，経済学の中心課題は配分の正義にあるとまで言ってしまうと，さすがに説明不足であるが，正義論として『国富論』を読むことが可能であることは，認められてよいであろう。しかし，『国富論』は法学ではないし，厚生経済学でもない。むしろそれを遥かに超えた新しい総合的な，社会の原理についての学問体系である。そのようなものとしての経済学なのである。言い換えれば，『国富論』はトムスンの言うように[43] 多数の路線が交わる中央駅という一面を持っている。したがって，一つの読み方としてホント＝イグナティエフ説は成立可能であるが，『国富論』を正義論としてしか理解しないというのであれば，それは，きわめて不十分である。

独自の体系を構築した宇野派は別として，内田義彦，杉原四郎から，平田清明，広松渉，淡路憲次，山之内靖，望月清二，佐藤金三郎等の多くのマルクス研究者が，学史的・思想史的な，すなわちアカデミックなマルクス研究に投入し，マルクス研究の世界的先端を形成した時代があった。これは他には例のない多数の研究者が取り組んだ相乗効果の産物であった。環境もまた彼らのマルクスへの投入に加勢した。このアカデミックなマルクス研究は，戦前のような権威主義的国家に吸収されてしまった依存的な臣民に代わって，自由で自律した市民の確立を課題とし，そのような自律した市民による民主主義的な社会形成を戦後日本社会の課題として説いた市民社会論の中核をも担っていた。そして市民社会論において，ロック，スミス，マルクスは相克しつつも連携する存

42) Hont, I. and Ignatieff, M., "Needs and Justice in the Wealth of Nations" in *Wealth and Virtue*, Cambridge U. P., 1983, p. 2.（水田洋・杉山忠平監訳『富と徳』未来社，1990年，3ページ）。
43) Thompson, E. P., *Customs in Common*, Merlin Press, 1991, p. 201.

在であった。

この市民社会論の中心が政治学（丸山真男，松下圭一）だったのか，経済学だったのか（高島善哉，大塚久雄，内田義彦，平田清明），あるいは法学だったのか（川島武宜），あるいはまた社会思想史だったのか（水田洋，鶴見俊輔）については議論の余地があるかもしれない。しかし，参加，自律，富，権利，連帯といった価値概念が市民社会論の中核にあったことは確かである。いずれにせよ，アカデミックなマルクス研究と関連した，あるいはそれを意識した市民社会論は，現実社会に対する建設的かつ批判的な，すなわちポジ・ネガの二面的な視点を持ちうるものとして強みがあった。そうだとすれば，市民社会論は用済みとして捨てられたり，消滅してはならず，いまなお有効性を持たなければならないであろう。

それは，最近では，公共性をめぐる論議に継承されているのではないかと思われる。しかし，そこではマルクスではなくアレントやロールズが重要な思想家となっているように思われる。そしてそうした公共性論とともに当然のことながら，共和主義が復活している。復活しつつある共和主義も，公共性論と同じく多様性があり，必ずしもわかりやすいわけではない[44]が，しかし，その根本において，共和主義が求める公共的人間とは，公共的活動にコミットするエートスをもった市民であり，かつての市民社会論の市民と全然別のものではないように思われる。

田中正司も元はこの市民社会論者の1人であった[45]。その意味ではアカデミックな市民社会論のエートスがスミスに持ち込まれて，異例の緻密な研究に結実したと見るべきかもしれない。ただし，田中の抽象的で晦渋な文体が，その研究成果の理解と継承を妨げている嫌いがあるのは残念である。それは一面ではポーコックの場合と似ているかもしれない。

---

44) オノハン（Honohan, I., *Civic Republicanism*, Routledge, 2002.）が行っているように，現代の共和主義論を，政治思想史，政治哲学，憲法論に区分することが適切であろう。

45) 田中正司『ジョン・ロック研究』未来社，1968年，田中正司『市民社会理論の原型』御茶の水書房，1979年。

そしてわが国の貢献として可能性があるのは，この戦後のアカデミズムの遺産としての市民社会論の批判的参照を基礎にしたスコットランド啓蒙研究ではないかと思われる。その意味でメディック[46]やホント[47]の仕事はわが国の学界ではなじみやすいし，それらに対比される，あるいはそれを継承した業績が生まれることは十分に期待されるであろう。

興味深いことに，戦後の市民社会論には，共和主義あるいはシヴィック・ヴァーチュ（Civic Virtue）への関心と見なしてよい要素を見いだすことができるように思われる。例えば，ウェーバーの圧倒的影響下で鍛造された大塚久雄のエートス論や，丸山真男による日本の思想的伝統の批判的分析，またマルクスの価値概念の貫徹に労働日をめぐる闘争という運動の契機を重視したユニークなマルクス学者であった内田義彦が作り出した「力作型」，「市民社会青年」概念などがそうであって，そこには，シヴィック・ヴァーチュへの関心が脈打っているように感じられる。とくに市民の自治に可能性を求めていった内田義彦の試みは，いささかユートピア的であるが，シヴィック・ヒューマニズムの思想に通底する価値関心が見られるであろう。

さらに一般的に，異文化社会の眼をもった日本の研究者がインサイダーの気付かない発見をする可能性はあるだろう。

---

46) Medick, H., *Naturzustand und Naturgeschichte der burgerlichen Gesselschaft*, Gottingen, 1973.

47) ホントの仕事はまだまとめられていない。主要な論文は次の通りである。Hont, I. and Ignatieff, M., "Needs and Justice in the *Wealth of Nations*" in *Wealth and Virtue*, eds. by Hont and Ignatieff. Cambridge U. P., 1983. Do., "The 'Rich Country-Poor Country' Debate in Scottish Classical Political Economy" in *Wealth and Virtue*, 1983. Do., "The Language of Sociability and Commerce: Samuel Pufendorf and the Theoretical Foundations of the 'Four Stages Theory" in *The Languages of Political Theory in Early-Modern Europe*, ed. by Pagden, A., Cambridge U. P., 1987. Do., "Free Trade and The Economic Limits to National Politics: Neo-Machiavellian Political Economy Reconsidered" in *The Economic Limits to Modern Politics*, ed. by Dunn, J., Cambridge U. P., 1990. Do., "The Rapsody of Public Debt: David Hume and the Voluntary State Bankruptcy" in *Political Discourse in Early Modern Britain*, eds., by Phillipson, N. and Skinner, Q., Cambridge U. P., 1993. Do., "The Permanent Crisis of a Divided Mankind: 'Contemporary Crisis of the Nation State' in Historical Perspective" in *Political Studies*, Xlii, 1994, pp. 166-231. Do., "Commercial Society and Political Theory in the Eighteenth Century: the Problem of Authority in David Hume and Adam Smith" in *Main Trends in Cultural History*, eds., by Melching, W. and Velema, W. Rodopi, Amsterdam-Atlanta, 1994.

英米でのスコットランド啓蒙の研究は，依然として，むしろこれまでにもまして，非常に盛んで，研究成果も絶えず出ているが，わが国では最近成果が一時ほどには出なくなってきている。在る年齢以上は大学改革の嵐のなかで忙殺される一方，英文論集に力を結集したせいもあるかもしれない。

英米，さらにはヨーロッパにおけるスコットランド啓蒙研究は，思想史の専攻だけではなく，哲学，政治学，法学，経済学，文学，歴史学，社会学等多様な分野の専門家が参加している。わが国では経済学者が中心で，それに少しばかり，他の分野の専攻者が加わり，歴史学者はほとんど参入していない。これはきわめて日本的な特徴であり，スコットランド啓蒙研究が経済学者，あるいは経済学から出発した社会思想家の圧倒的な影響下にあるのは，かつてならマルクス派の経済学者になるはずの研究者の一部が，スミスやヒュームに導かれて，スコットランド啓蒙研究に入っていった結果として理解できるであろう。したがって，道徳哲学，歴史，経済学を重視すべきであるという前述のジョン・ロバートスンのような問題意識は，わが国では例外ではない。

いずれにせよ，悠久な学問に性急な結論は適さない。真に望まれるのは，多様なテーマそれぞれに関する本格的な個別研究である。本格的な研究は日本で遂行されても国際基準を満たすであろう。しかし，それが認識されるためには英語で書かれるか，あるいは英訳されなければならないであろう。

【付記】 本稿は平成15-16年度，文部科学省科学研究費・基盤研究（B）（1）「近代共和主義の系譜とその現代的可能性の研究」（研究代表者・田中秀夫）による研究成果の一部である。

スコットランド啓蒙関連文献（過去5年間）

[1999年]

Devine, T. M., *The Scottish Nation*, Viking, New York.

Devine, T. M. and Young, J. R., *Eighteenth Century Scotland: New Perspectives*, Tuckwell Press.

Griswold, C., *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*, Cambridge U. P.

Kidd, C., *British Identities before Nationhood in the Atlantic World 1600-1800*, Cambridge U. P.

Pocock, J. G. A., *Barbarism and Religion*, vol. 2, *Narratives of Civil Government*, Cambridge U. P.

小柳公洋『スコットランド啓蒙研究——経済学的考察』九州大学出版会。

田中秀夫『啓蒙と改革——ジョン・ミラー研究』名古屋大学出版会。

[2000年]

Allan, D., *Philosophy and Politics in Later Stuart Scotland*, Tuckwell Press.

Brown, K. M., *Noble Society in Scotland*, Edinburgh U. P.

Klemme, H. F. (ed.), *The Reception of the Scottish Enlightenment in Germany*, 7 vols.

Mann, A. J., *The Scottish Book Trade 1500-1720*, Tuckwell Press.

Mizuta, H. (ed.), *Adam Smith's Library*, Oxford U. P.

Mizuta, H. (ed.), *Adam Smith: Critical Responses*, 6 vols, Routledge.

Wood, P. (ed.), *The Scottish Enlightenment: Essays in Reinterpretation*, Rochester U. P.

Phillips, M. S., *Society and Sentiment: Genres of Historical Writings in Britain, 1740-1820*, Princeton U. P.

水田　洋『思想の国際転位——比較思想史的研究』名古屋大学出版会。

[2001年]

Broadie, A., *The Scottish Enlightenment: The Historical Age of the Historical Nation*, Edinburgh.

Davie, G., *The Scotch Metaphysics: A Century of Enlightenment in Scotland*, Routledge.

Fry, M., *The Scottish Empire*, Tuckwell Press. (Pt. I).

Herman, A., *The Scottish Enlightenment: The Scots' Invention of the Modern World*, London.

Landsman, N. C. (ed.), *Nation and Province in the First British Empire: Scotland and the Americans, 1600-1800*, Associated University Press.

Suderman, J. M., *Orthodoxy and Enlightenment: George Campbell in the Eighteenth Century*, McGill-Queen's U. P.

Withers, C. W. J., *Geography, Science and National Identity: Scotland since 1520*, Cambridge U. P.

長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会。

[2002年]

Brown, M., *Francis Hutcheson in Dublin, 1719-1730*, Four Court Press, 2002.

Carmichael, G., *Natural Rights on the Treshold of the Scottish Enlightenment: The Writings of Gershom Carmichael*, ed. J. Moor and M. Silverthorne, Liberty.

Carpenter, K. E., *The Dissemination of the Wealth of Nations in French and France 1776-1843*, New York, 2002.

Manning, S., *Fragments of Union: Making Connections in Scottish and American Writing*, Palgrave, 2002.

Withers, C. and Wood, P. (eds.), *Science and Medicine in the Scottish Enlightenment*, Tuckwell Press.

田中秀夫『社会の学問の革新』ナカニシヤ出版。

[2003年]

Broadie, A. (ed.), *Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*, 2003.

Buchan, J., *Crowded with Genius: The Scottish Enlightenment: Edinburgh's Moment of the Mind*, Harper Collins.

Buchan, J., *Capital of the Mind: How Edinburgh Changed the World*, John Murray.

Devine, T. M., *Scotland's Empire, 1600-1815*, Allen Lane.

Force, P., *Self-Interest before Adam Smith: A Genealogy of Economic Science*, Cambridge U. P.

Sakamoto, T. and Tanaka, H. (eds.), *The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Routledge.

田中正司『経済学の生誕と『法学講義』——アダム・スミスの行政原理論研究』御茶の水書房。

栢植尚則『良心の興亡——近代イギリス道徳哲学研究』ナカニシヤ出版。